
置き去りのアルタイル それは古本屋の日記にあった。

霧島美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

置き去りのアルタイル それは古本屋の日記にあった。

【Nコード】

N7835L

【作者名】

霧島美月

【あらすじ】

それは、とても切ない恋でした。

『織姫と彦星はね、また会えるはずだから』

「私」は地元の県立高校に通う3年生。生まれ育った街に再び引越して来たが、そこである不思議な噂を耳にする。気になった私は噂の根源である「古本屋の日記」を調べに行くのだが……。あの夏に、取り残されたままの私がそこに居た。

p1. プロローグ

この街に引越してきてからもう3ヶ月になる。

友人は出来たし、部活にも入った。商店街の店は粗方巡ったし、「アン・アントニオ」なんて小ばかにしたような名前のゲーセンの攻略もした。自転車はどこに路駐すれば回収されないかも覚えた。

それでも、それでもまだ

私は『知らないこと』なんて山ほどあったのだ

7月。夏の日差しが眩しい。

私は友人のヒロからある噂を聞き、ある古本屋を訪ねた。

商店街の裏道の、さらに奥まった路地。地元の人でもあまり知らない道だ。古びたCD屋の2階に、その店はあった。

店内は意外に明るく、小奇麗に整っている。山のように積まれた本は、最新の雑誌からいつ出版されたのか分からない物まで様々だ。カウンター越しに初老の店主が腰掛けている。白髪に黒縁の眼鏡。痩せこけたその頬には、深い皺しわをたたえている。彼はゆっくりとこちらを向くと、かすれた声でこう言った。

「おや、お客さんとはめずらしい。こんな檻かご屋に何の用ですかな？」

……客にかける言葉か？と少し思ったがやめておいた。

「ちょっと噂を聞いて来たのですが」

私がそう言うと、主人は少し間を空けてから、そうですか、と言

って店の奥に歩いて行ってしまった。

……なんて無愛想な人だ。まあ良い、適当な漫画でも立ち読みして帰ろう。

そう思っていると、主人はすぐに何かを手にして戻ってきた。早い。このおじいさんにはインテル入ってる、絶対。

「噂とはこのことでしょうか」

主人は日焼けした日記帳のようなものを差し出した。

「ありがとうございます」

私は静かにその本のページをめくっていったが、ヒロの言葉を思い出したので、すぐに閉じた。

『商店街の裏道に、変な古本屋があるんだ。その古本屋のじいさんの日記は、自分で読んでもぜんぜん面白くない。でも不思議と、そのじいさんに日記を読んでもらうと、聞き込んだじまうんだな。これが。いや、面白かったな！』

嬉しそうに語るヒロの顔が浮かぶ。そこまで言うなら試してみよう。

「すみません、この日記を読んで頂けますか？」

「……なるほどなるほど、ヒロ君のお友達ですか？いいでしょう、お読み致しますね」

そう言って主人は眼鏡の奥の細い目を少し光らせ、日記を読み始めた。

> i 7 7 3 2 — 1 2 0 6 <

p2・ヒカル

「4月5日、今日は…」

「あの、確か日記は1月から始まっていたはずじゃ……?」

「そうですね。でも、貴方が見えるのはこのページからですので」

……驚いた。このおじいさんは厨二病らしい。この齢にして。

私は質問するのをやめた。ヒロが面白いと言ったのは、この厨二病臭さなのだろうか?

だとしたら期待はずれだが、それはそれで面白い。

「そうですか、では続けてください」

私の言葉を聞くと、主人はにっこりと微笑みながら再び日記に目を落とし、語り始めた。

かすれた声が、妙に心地良い。

4月5日

今日は春だと言うのにとっても暑い。始業式の体育館は蒸し返すような熱気だった。新しく始まる学校生活にドキドキしている。

4月9日

クラスメイトに好みのタイプの人を見つけた。何とかしてうまく話しかけられないかな。

4月12日

その人の名前は「ヒカル」と言うらしい。友人2、3人がいつも周りにいるので話しかけられない。
ああ、邪魔な取り巻きどもめ。

4月26日

ハンカチを無くして困っていたら、ヒカルが届けてくれた。初めてヒカルと話した。
ヒカルは優しかった。

ここで主人はページを捲^{めく}った。

(……なんだか飛び飛びの日付の日記だ。そのくせ、私はなんだか興味を引かれた。私も昔は好きな人がいたような気がする。昔と言っても、まだ17年しか生きていないのだが。)

5月6日

ヒカルが一人で掃除をやらされていたので、手伝う。
ヒカルは苦笑いしながら、「みんな忙しいみたいだから」と言っただけだ。みんなゴールデンウィーク明けでサボりたかっただけだろう。それでもヒカルは健^{けなげ}気に掃除をしていた。
二人で掃除をしている間、色々な話が出来た。

……ヒカルの家は母子家庭らしい。お父さんは若い頃に亡くなったそう。お母さんは一日中働き通し、ヒカル自身も内職を手伝っているらしい。割の良いバイトを探そうにも、小学生では雇ってくれずが無い。ヒカルはため息をついていた。ヒカルの悲しそうな目が忘れられなかった。

（この日記は、小学生の頃のおじいさんの日記なのだろうか？それにしては文章が複雑だし、おじいさんが後になってから書いた物なのだろうか…。）私は気になったが、敢えて聞かないことにした。

…小学生、か……。

私は、3ヶ月前にこの街に『引っ越してきた』と言ったが、正確には、『戻ってきた』と言う方が正しい。

小学生位の頃までこの街にいて、後は両親の仕事の都合で引っ越しの連続だった。

そして親の仕事が落ち着いた3ヶ月前に、この街に戻ってきたのだ。

しかし、転校先であまりに色々な事を体験し過ぎた所^{せい}為で、私は小学生の頃の記憶など殆んど忘れていた。

私は、主人の日記を読む声に集中しながら、自分の記憶を辿る事にした。

p3・タンジョウビ

私が少し物思いに耽^{ふけ}っていると、1人の客が入って来た。

「こんにちは、今日もまた来ましたよ」

主人は日記を読むのを一旦止め、顔を上げて返事をした。

「やあ、いらつしゃい。ゆっくりしていつて下さいね」

客は中性的な顔立ちで、男か女が分からない。歳は私と同じくらいだろうか。その肌は驚くほど白く、手足は病的なまでに細い。

客は私の姿を見て少し驚いたように、今日は他のお客さんがいるんですね、と言った。

本当に何で潰れないんだこの店は。

その客は、棚から小説を手にとると、店内の丸椅子に腰掛けた。その慣れた様子から、客がこの店の常連である事、まだ暫らくこの店にいるつもりである事が、容易に推測できた。

「日記を読んでもらっているんですね。どうぞ続けて下さい」

客は私に向かってそう言うと、黙々と小説を読み始めた。小説の表紙には、『ヘルマン・ヘッセ著「車輪の下」』とある。

……随分暗い本を読むんだな、と私は思ったが、何故だかその客には、その本を読む姿がとても似合っているように思えた。

「ええと、どこまでお読み致しましたかな？」

「5月6日までです」

私がすかさず返答すると、主人は少し慌てた様子で再び日記を読み始めた。

「ああ、失礼しました、では続きから」

5月18日

帰り道でヒカルに会う。ヒカルは自販機をじっと見ていたので、りんごジュースをおごつてあげたらとても喜んだ。お小遣いは多い方ではないが、ヒカルほどではないだろう。余裕があればこれからもおごつてあげる事にした。ヒカルは割と近くのアパートに住んでいることが分かった。

5月26日

明日は日曜日、しかも両親は働きに出ていて暇なので、ヒカルと遊ぶ約束をした。
ワクワクして、今日は眠れないかもしれない。

5月27日

今日は朝からヒカルから電話があった。「内職が忙しいので今日は遊べない」という内容だった。
がつくりした。一日憂鬱だった。あまりに気が沈んだので、また遊びに行こうと声をかける気にはなれなかった。

(……何だか可哀想な日記だ。友人なら他にもいただろうに、この日記の書き手は、きつともの凄くこのヒカルという子が好きだったんだなあ、と私は思った。)

6月15日

最近季節はずれの風邪が流行っている。咳の風邪なので、マスクをした方が良さそうだ。

6月28日

最近ヒカルの顔色が悪い。
友人たちも心配している。風邪だったらまだ良いけれど、どうもそんな風には見えない。心配なので声をかけたが、ヒカルは弱弱しい笑顔を見せるだけだった。

7月5日

7月7日は自分の誕生日だ。我ながら七夕が誕生日だなんて洒落ている。

ヒカルもこの日はどうしても休暇を取りたいと言うので、内職を手伝った。自分は両親が留守がちな事もあり、裁縫には自信があった。二人でやると、かなり良いペースで終わった。

近所のおじさんも手伝いに来てくれたが、あまりに不器用で、指に針で片っ端から傷を付けていくほど、全然ダメだった。

何より、せっかくヒカルと二人きりになれたのに邪魔された気分になった。

（こんなピュアな恋愛の記憶は私には無いし、聞いていて少し腹が立ってきた。小学生の癖にマセている、としか思えなかった。）

私は転校続きで、友人や恋人なんて別れるだけのものだ、と最初から決めていたからだろうか。

私は貧乏ゆすりなどしながら、主人の話を聞いていた。

p4・オリヒメ ト ヒコボシ

7月6日

明日はヒカルと2人だけで会うことにした。

友達もそれを察してか、明日遊ぼうとは誰も言わなかった。5月の事もあり、自分が少し臆病になっている気がした。またヒカルが来なかったらどうしよう。悪い方ばかり考えを巡らせるのは、人間の悪い癖だ。

でも、ヒカルは明日、絶対に来るつもりらしい。ヒカルは「七夕に会う約束なんて、織姫と彦星みたいで素敵だよ」なんて柄にも無い事を言っていた。

ヒカルが帰り道、なけなしのお金でエノテラの花束を買ってくれて、いるのを見かけた時、胸が熱くなった。

エノテラは7月7日の誕生花だ。

今日は庭の短冊に『ヒカルが幸せになれますように』と書いた。

7月7日 午前0時

眠れない。外では激しく雨が打ちつける音がしている。今日1日は雨になるそうだ。

これでは七夕だって言うのに、天の川どころか、織姫や彦星すら見えないだろう。

7月7日 午前5時

雷が鳴り出した。家の中に低い音が響く。

横になっていたりすることすら出来なくなつて、寝巻きのまま家をつろつろしていた。

7月7日 午前7時

今日はヒカルに昼前に家に来てもらって、一緒に食事をしたり、遊んだりしようと言う事になっていた。

外食にしなかったのは、疲れているヒカルの体に負担をかけないようにする心遣いからだ。

昼前まで待つていられず、料理を作り始めていた。

慢性的に栄養不足なヒカルの為に、図書館から借りてきた栄養学の本とにらめっこしながら作り上げた。我ながら素晴らしい出来だ。

後はヒカルを待つだけとなった。

7月7日 午後12時

なかなかヒカルが来ないので、電話をかけてみたが、留守電になってしまった。

あんまり料理を置いておく訳にもいかないので、雨だがヒカルのアパートまで行ってみることにした。

雨の道はやたらと長く感じる。それでも、暫らく歩くとヒカルのアパートに着いた。

傘の水滴を落とした後、錆び付いた階段を上って行く。

突き当りの1番奥の部屋がヒカルの部屋だ。

ノックしたが、返事はない。鍵がかかっている様だ。ヒカルのお母さんも居ないらしい。

「途中ですれ違いになったかな」と思い、家で待つていることにした。もしヒカルが家に戻っていても、電話をかければ済むだろう。

再び傘をさして家に帰った。

7月7日 午後10時（この辺りのページは破けていたり、ペンの字が荒くなっている）

ヒカルは来なかった。電話も一日中繋がらなかった。暗くなるまでずっと家の前で待っていた。横殴りの雨で、体は冷え切ってしまった。

夜だというのに、裁縫と一緒に手伝ってくれた近所のおじさんが息を切らして家に来た。

「ひ、ヒカルのお母さんが過労で亡くなったそうです……。ヒカルは今病院にいます」

急に眩暈めまいがして、立っている事が出来なくなった。頭の中が真っ白になった。

願
い
事
を
書
い
た
庭
の
短
冊
が、
風
に
吹
き
飛
ば
さ
れ
て
い
っ
た。
> i 7 8 4 1 — 1 2 0 6 <

p5・ヨルノ ホシノ カワ

主人はここまで読むと、古傷だらけの指で静かに本を閉じた。

「……今日はもうこの辺りにしておきますか？あのお客さんも帰られた事ですしね」

店内の時計はいつの間にか午後9時を指している。あの色白の客も、私が気が付かない間に帰ってしまったようだ。

……短い時間の筈だったが、思いの外時間が経ったらしい。

しかし、私は日記の続きが気になったので、食事を取ってからまた来ることにした。

主人は、11時以降は補導されますよ？と言いつつも、めずらしい客の訪問が少し嬉しかったようで、快くOKしてくれた。

私は夜の街に出た。カラオケ屋のネオンが眩しい。

街は七夕のセールなんかをやっていたりする。そう言えば今日は7月6日だった。

どうせ家に帰っても親は留守なので、私は駅前のファミレスで食事を取る事にした。

店の入り口のドアを開けようとすると、先程古本屋に居た色白の客にバッタリと会った。

私は面識なんて無いに等しい筈なのに、つい声をかけてしまった。

「ああ、さつきお会いした方ですよ。今夜は。これから食事ですか？」

私は慣れない他人行儀な敬語で、しどろもどろになりながら言った。

その人は私の顔を見ると、少し驚いてから、笑顔で返事をした。

「今晚は。そう、夕飯、これからなんです。良かったら一緒にどうです？」

さつき知り合ったばかりの人（正確には知り合っすらいないが）と相席になるのは多少抵抗がある。

しかし、店内は意外に混んでいて、相席の方が効率は良さそうだ。

「そちらさえ宜しければお願いします」

店内のイチャつくカップルが鬱陶しい。

……私達は相席になった。

相手の顔を近くで見ると、引くほど美人、もし男なら美男子と言った感じだ。白いなめらかな肌が眩しい。パツチリした二重まぶたは眼力があつて恐いくらいだ。

これだけ近くで見ても、その人の性別は分からなかった。性別を聞くというのも失礼な話なので、名前から探り出す事にした。

「あの、お名前は？」

「夜乃ヨノです」

しまった、苗字で来られたか。今更フルネームでは聞き難い。

「素敵な名前ですね。星川です。以後よろしくお願いします」

何だこの下らない会話は。婚活1年目、お見合いの挨拶の様だ。やっぱり慣れない敬語は無闇に使う物ではない。私は少し後悔した。

「……星川さんもあの日記をお読みになったんですか？」

「ええ、でも全部ではないです。ヒカルさんのお母さんが亡くなる所まで」

ここまで言いかけた所で、店員がおしほりを持って来た。

新米店員なのか、おしほりを1つしか持って来なかったので文句を付けたら、慌てて持って来た。

まあ、手は入り口の水道で洗っていたので必要ないのだが。

「一度読むと忘れられないですよ、あの日記。ちょうど明日も七夕ですね……」

そう言いながら、夜乃は窓の外を眺めた。

p6・ソンザイト イワカン

「七夕……ですか……。今はあんまり祝われない行事ですよね」

私がこう言うと、窓の外を眺めていた夜乃は、急にこちらに向き直してきた。

「星川さんの家では七夕は祝いますか？短冊とか」

突然の夜乃の反応に驚いた私は、コーラフロートのアイスを一欠片零してしまった。

零れたアイスを紙で拭き取りながら私は言った。

「うーん、そんなに祝わないですね。子供の頃はよくしましたけど」

「じゃあ、明日が七夕だって事は覚えてました？」

「まあ、一応」

「そうですか……」

……しつこいなあ、と私は内心想った。あの日記はそんなに影響力が有るのだろうか。

だとしたらもう洗脳に近い。

その後の暫らくの間、夜乃と他愛も無い話を楽しんでから、私は古本屋に戻る事にした。

夜乃は、自分は後からまた行くので、先に行っていて欲しい、と

ような事を言った。

私は、普段は頼まないミートスパゲッティの残りを食べ終えると、夜乃に挨拶して店を後にした。

夜とは言え、7月の気温は高い。

店の中の冷房の効いた空間から出ると、途端に汗ばむ。私は部活で使い切れずに残っていた制汗スプレーを振り撒きながら、早歩きで古本屋へと向かった。

古本屋へ行くまでの裏路地は、夜ともなると少し怖い。

一見潰れているのか分からない居酒屋の古びた看板は、豆電球が半分以上点いていない。

裏路地は大体こんな店ばかりなので、とても暗い訳だ。駅前でこんなに光の届かない場所もめずらしい。

古本屋に着くと、主人が店の前で出迎えてくれた。

「お待ちしておりましたよ」

「ああ、わざわざすみません」

店はもう閉めなくてはならないらしいので、シャッターを下ろすの手伝った。

見るからに年季の入ったシャッターだが、大事に手入れされている所為か、随分スムーズに下ろせた。

私たちが店内に入り終えると、主人はカウンターに置いてあった日記を手にした。

そして、私に椅子に座るよう合図した後、何か躊躇^{ためら}う様に話しかけてきた。

「一つ……聞いて宜しいですか？」

私は少し訝^{いぶか}しく思ったが、直ぐに答えた。

「この日記の『ヒカル』さんは男性だと思います？女性だと思います？」

……言われてみればそうだ。

『ヒカル』って名前は男女どちらでもあり得る。

「……分かりません。日記の書き手も、自分の性別が分からないように書いていますし」

主人は何処か納得したような表情を見せた。

「そうですか、そうですか……」

主人はそう言うと、コーヒーを淹れてくれた。

豆から挽いたタイプの、本格的な物だ。素人の私が飲んでも、高級な物だと分かる。

「何度も中断してしまいましたが、今度は最後まで読んでしましましょう。それで、この日記の役目は漸く、漸く果たされるはずですから」

主人は意味深な事を言うと、再び日記を手に取り、感情を込めた声で語り出した。

……今思い返して見れば、私はあの時よりも違和感を感じなかったものだ、と呆れるばかりだ。

p7・ヒトリボッチ ノ アルタイル

最後の日記が始まった。

一段と静かになった部屋に、主人の声だけが静かに刻まれていく。

7月7日 夜

両親はいつも通り留守だったので、伝えてくれた近所のおじさんは、そのまま車で病院まで連れて行ってくれた。

「励ましてあげる事。それが無駄なほどにヒカルの悲しみは深いはずです……。でも、それでも励ます事しか出来ません、私達には……」

運転席のおじさんの目には涙が浮かんでいるのが、ミラー越しに見て取れた。

この時の自分は、ショックの所為だろうか、驚くほど冷静だった。何かドラマや映画のラストシーンでも見ているような。そんな客観的で、冷え切った心。自分の事では無い。これは夢。そう言い聞かせるような。

しかし、病院のベッドで横たわるヒカルのお母さんと、泣き崩れるヒカルの姿を確認すると、自分はあるという間に現実という残酷な運命に引き戻された。病室はあまりに突然の死の所為か、親族でもない自分達ですらスムーズに入ることが出来た。

つまり、いないのだ。ヒカル以外の誰も。

ヒカルは一人で泣いていた。

……分かっていた。分かってはいた。これは現実。先を見なきゃ。声をかけなきゃ。でも遠い。ヒカルの肩が10メートルぐらい離れているように感じる。

励まさないや。何て？口ではどんなに同情しても、悲しみはその人自身の物。共感しただなんてエゴ。そんなんじゃダメ。少しでもヒカルの心が癒されるような。…思いつかない。在る訳が無い。言えないよ、泣かないで、なんて……。

「ヒカル……」

呼びかけてもヒカルはこちらを向きすらしない。

ヒカルは、今はただの『モノ』になってしまった母親の細い手を掴み、ずっと泣いていた。

そつと肩を寄せた。

それぐらいいしか出来なかった。

時間が無限に刻まれていくようで怖かった……。

その後の事はあまり良く覚えていない。

確か両親も来て、ある程度したら自分を家まで連れて帰った事。あの程度？それすら分からない。ただ、悔しそうに泣くヒカルの顔しか思い浮かばなかった。

疲れ果てて眠ってしまったらしい。

7月8日

ヒカルは親戚に引き取られる事になった。

今までは、お母さんと貧乏なりに何とかやっていたけれど、もうヒカルは一人ぼっちなのだ。

家や戸籍の手続きの準備がある為、暫らくはマンションに親戚と一緒に残って、今年の冬には長野まで引っ越すそうだ。

……ヒカルと過ごす残りの日々を一日でも無駄にしたくないと思い、家から飛び出そうとした。

だが、あまりの高熱に足元がおぼつかない。それはそうだ。昨日一日中雨に当たっていれば、風邪も引く。

いつもは無関心な両親にも、今日ばかりは止められてしまった。

ああ、悔しい。もう何もかもが嫌な世界に見えてくる……。

p8・カクティテキ ナ ワカレ

7月9日

一日で風邪から回復したので、学校に行ってみた。

当然の事ながら、ヒカルは学校に來なかつた。担任の先生も訃報を聞いたが、生徒の事を想つて言うのは止めたらしい。

学校から歸つてランドセルを置くと、ヒカルの家に行く事にした。やっぱり、どんなにお節介であろうとも、一緒に居たいと思う。家の冷蔵庫にあつたアイスをドライアイスと一緒にビニール袋に詰め込み、持つていく事にした。ヒカルはバニラ味のアイスが好きだ。もし食べてくれなかつたら自分で食べよう。うん。

ヒカルのマンションに着いた。部屋の前には親戚と思しき中年の夫婦がいた。それから娘さんだろうか、若いお姉さんが忙しそうに荷物を運び込んでゐる。

「こんにちは。ヒカルのお友達かな？」

お姉さんが話しかけてきた。細身の人なのに、重い段ボール箱を軽々と担いでゐる。

パツチリとした目は、ヒカルと何処か似ていた。じろじろ見ていても仕方ないので、返事をする。

「はい、そうです。今はお忙しいですか？」

「うん。それは大丈夫なんだけど……。あの子自身がちょっと……ね……」

「じゃあ、アイスだけでも置かせて下さい」

そう言うと、図々しくもヒカルの部屋の前まで行った。

「ちょ、ちよつと……」

「どうしてもヒカルと話がしたいんです」

引き止めようとするお姉さんに敵意の目を向ける。家が遠いとは言え、ヒカルの母のお見舞いに来なかったような人だ。自分としては軽々に許せるような人ではない。当然だ。

「ヒカル。アイス食べよ」

自分でも露骨な程、無理に取り繕った明るい声。本当は涙を堪えるのに必死だった。

「うん、ありがとう。入って……」

部屋の中から泣き続けて掠れてしまったヒカルのか細い声^{かす}が聞こえた。

躊躇なく入る。そうしないともう泣き出しそうで無理。

ドアを開けると、布団に包まって部屋の隅で泣いているヒカルが居た。

「ごめん……、せっかくアイス買ってきてくれたのにこんなんで……」

「いいよ、食べて。早くしないと溶けちゃうから」

布団から出て来たヒカルは別人かと思うほどやつれていた。大きな

くまを湛えた濁った目。

でも、それに驚いた感じを出さないようにする。

「おいしい……」

「良かった」

「また買ってきてもらっても良い……?」

「もちろん。今買いに行こうか?」

「はは、流石に無理」

「じゃあいつでも言ってね。ヒカルはすぐ遠慮するから」

「うん……」

言葉が途絶える。

沈黙。

声は無くなったけど、二人で過ごす時間は会話に満ちていた。気遣う自分と、そうさせまいとするヒカル。明日からの決意。もう戻れない昨日、元の生活。

そして、おぼろげながら確定的になった、別れ。

しばらくこうして二人で座り込んだ後、部屋を後にした。

「また来るよ」

「今日はありがとう。すぐく落ち着いたよ」

ヒカルはその言葉に、誰よりも自分が落ち着いたのは、言うまでも無い。

p9・ナツノダイサンカッケイ

8月21日 午後8時

今日は花火大会だ。

あの日からヒカルは少しずつ元氣を取り戻しているように見える。

ヒカルの親戚はわりとお金持ちらしくて、ヒカルがバイトをしなくても良くなり、遊べる時間が増えたのは皮肉な事だ。

ヒカルのお母さんは、どうしても子供を自分で育てたかったらしい。何でも死んでしまったお父さんとの約束らしいのだが……。今となつてはそれももう分らない。

大きな花火を眺めていると、ヒカルは蚊に刺された、なんてはしゃいでいた。

花火より隣にいる君の方が……。なんてベタな歌や詩があるけれども、^{あなが}強ちバカに出来ない。
今の自分が多分、それだ。

「綺麗だね。花火」

「うん。でもすぐ消えちゃうからもったいないなあ」

遙か先に咲いた花達の光に照らされたヒカルは、ちょっと寂しそうに言った。

ここだ。ここでネガティブにさせてたまるか。

「一瞬光るから、綺麗なんだよ。きっと」

「一瞬？」

「そう、一瞬。ずっと光ってはいないから。だからそのありがたみが分かるんだよ」

「そうかあ……。そう言われてみればそうかも知れないね」

花火大会はその言葉通り、あっという間に終わってしまった。場所取りに励んだ人々は、事が終わるととっと片付けて帰ってしまふ。

自分達はもう少しの間、花火を打ち上げていた川辺によってから帰ることにした。

空には夏の第三三角形と呼ばれる、アルタイル、デネブ、ベガが輝いている。

織姫と彦星は、まだ未練がましく天の川を隔てて見つめ合っている。

「今年の冬にはお別れだね」

ヒカルがいきなり切り出してきた。

「今年仲良くなったばかりなのに、残念だなあ。誕生日プレゼントも渡し損ねちゃって、片付けられちゃったし。来年は、もうこの星達も別の所から見てるのかあ」

呑気そうに言うヒカルの声を聞くと、自然に声が震えた。

「また……」

「？」

「また来ようね！ 絶対！」

涙ぐむ私の顔を見たヒカルは驚いたように言った。

「うん。きつとね」

「きつとじゃない！ 絶対！！」

「わかったよ。絶対、絶対守る。約束だね。いつき」

「名前呼んでくれるのめずらしいね」

「……バイトで敬語に慣れちゃって。あんまり気軽に名前を呼べないんだよね」

ヒカルは少し恥ずかしそうに言った。そう、自分は『いつき』という名前だった。

「じゃあね」

「また明日」

た。

それからのヒカルと過ごす日々は、あっという間に過ぎて行っ

時間は待ってくれない。いつも、いつも。

p10・ヤコウペン

季節は移り変わる。街の緑は紅^{あか}へと姿を変えて行く。

運動会、学芸会。行事は沢山あったけど、人を満足させる時間は、あつという間に零れ落ちていく。

砂時計。

ヒカルと自分に残された時間はもう秒読みだ。

11月28日 日曜日

今日は日曜日。ヒカルは引越しに向けて準備をしていた。

荷造りの紐の鈍い音が、古びたマンションの一室で、絶え間なく響く。

静かにその様子を眺めていた。ヒカルの家の外から。下手をしたら変質者だ。子供だから許されるけれど。

…… ああ、遠くに行ってしまうんだなあ。本当に。

12月4日 土曜日

ついにヒカルとのお別れの日がやってきた。

親戚達は一足先に長野へ戻っていったので、ヒカルは今日の夜行バスで、一人長野へと旅立つ。

なんでわざわざそんな事をするのか。

それは新しい生活に切り替えるための、ヒカルなりの決意らしい。

今日は朝から二人でちょっと気取ったレストランに行ったり、一緒に買い物したりして過ごした。

隣で笑うヒカル。写真を撮っておく。

そんなに撮っても見きれないよ、とヒカルに笑われる程、一緒に写真を撮った。

時間は、写真の中でだけ、薄っぺらい永遠になれる。

もう、こんな風に二人で話せるのも、多分今日で最後。また会えたとしても、それは記憶の中の自分達とは違う、新しい二人。

日はすっかり沈んだ。

長距離バスの停留所。夜行便はここから発つ。

空にはベテルギウスやリゲル達が眩い巨人を成している。まはゆ

今日は12月にしては、凍て付くような寒さだ。白い吐息が漏れる。

「手紙書くよ」

「うん。こっちもね」

「長野は寒いから風邪引かないようにね」

「いつきは長野に行ったことあるの?」

「無いけど、そう聞くから」

「そう、ありがとう。多分大丈夫」

ヒカルは暫らく考え込んでから、ポツリと言った。

「……誕生日プレゼント、絶対届けに行くよ」

「えっ？ 良いよ、郵送で。中学生になったら忙しいでしょ？」

「だめだめ、こういう時に無理してでも行かないと、もう会わなくなっちゃうから」

「じゃあ待ってるよ」

「待ってて。必ず行くから」

もう会えないかも知れない。二人はそれに薄々気づいている。でも……。

「ヒカル……」

「……何？」

「好き」

「……うん」

堅く抱き合った。

二人とも上着を着込んでいるのでモコモコした。ちょっと雰囲気が悪れるけど。

ドラマみたいなキスとか、そんな物は必要ない。

今はただ、ここに在る『今』を確かめたい。

たった少しの時間だったけれど、確かに自分達二人の重なっていた時間。それを、ただ……。

気が付いた時には、ヒカルはもうガラスの向こう側に居た。バスの中から一生懸命手を振るヒカルに、こっちも必死に手を振った。

気を利かせてくれたバスの運転手さんが、そつと窓を開けてくれた。

「ヒカルの事、絶対忘れないよ。一生愛してる」

「うん、いつき、大好きだよ。絶対忘れない」

「……じゃあね」

「うん。じゃあね。また」

最後の言葉はお互い涙でぐしょぐしょで、殆んど聞き取れなかった。

バスが動き出した。ヒカルはまだガラス越しに手を振っている。私もバスが見えなくなるまで手を振り続けた。

バスがミニカーほどの大きさに見えた頃。それは交差点に差し掛かった頃だった。

突っ込んだ。

大型トラックが。

あの長距離バスに。

バスは横転した。ガラスが粉々に吹き飛んだのが、遠くからでも分かった。

「ヒカルーーーーーっ!!」

叫び声をあげた自分を、周囲の人は一瞬訝しげな目で見たが、事態が分かれると野次馬と化した。

駆ける。人生で一番速く。

何で？何でこんな事になるの？何か悪いことをした？

神様っていないの？悪魔だけ？

そんなに人間を不幸に突き落として楽しい？

横転したバスに駆け寄る。事故の直後なので、まだ警察も居ない。

「ヒカル、ヒカルー！ 返事をしてー！」

誰からの返事も無い。

「大丈夫だよ、ヒカル！ 今、救急車が来てくれるから、いま……」

誰からの返事も無い。

「だ、大丈夫だから。お願いだから死なないで……！ ひっ……ヒカル……ううわあああああぁん……」

誰からの返事も 無い。

……即死だった。運転手を含めた乗客全員。

トラックの運転手は飲酒運転と業務上過失致死の疑いで逮捕された。
。

p11・タナバタ ノ ヤクソク ハッピーバースデー

12月6日

今日はヒカルの葬式があった。

余りにも突然の死だった為、すぐ翌日、という訳にはいかなかったらしい。

棺の中で、溢れる様な花達に囲まれたヒカルは、まるで眠っているかのようにだった。

すがいないそんなしょう
頭蓋内損傷 平たく言えば頭を強打した事による死。外傷は殆んど無い。

確か電車の脱線事故でもこの死因が一番多かった気がする。

液晶の向こう側だった悲劇は、いつ自分の物になるか分からない。せかい

悲しみ、と言う言葉を遥かに超えた、絶望。

もう、無いよ。何も。

献花を済ませると、ふらふらと葬儀場を出た。

ちよつと具合が悪いから外の空気を吸いに、なんてもっともらしい理由をつけて。

気が付くと、自分の体は近くの廃ビルの屋上に居た。

安全用のフェンスなどなく、20メートル下の道路までが、とても近くに感じられる。

もう、良いか。

ヒカルの待っているあっち側へ。

崩れかけたコンクリートの縁に足をかける。

みんな、さようなら。お父さん、お母さん、ごめんなさい。

……なぜか不意にヒカルの顔を思い出した。

ヒカルはきつと、自分の分までいつきに生きていて欲しい、と言うだろう。

ハッとした！今まで意識が無かったかのようだ。

なんでこんな簡単な事に気が付かなかったんだろう。

そう、まだ自分には。

日記の最後のページ

もう恋なんてしない。『私』の心に、ヒカルとの約束がある限り。
誕生日が来るたびに思い出してしまうかも知れない、七夕の約束が。
もう、全て忘れよう。

ほしかわ いつき

「これでこの日記はお終いです」

主人は嗚咽で止まりそうになる声を、搾り出すように言った。

「私も、ヒカルのお母さんの病院へ送った時の貴方の顔が忘れられませんよ。『星川樹^{いっき}』さん」

私の目から涙が止め処^どなく溢れる。

幸せだった日々。
恋人を失った冬の日。

忘れていた誕生日。
果たされなかった、誕生日の約束。

私の中に眠っていた記憶。日記を聞いてイライラしたのも当然だ。
もう、恋なんてしないと決めていたのだから…。

「ゴーン、ゴーン」

古本屋の柱時計が、鐘を鳴らす。
7月7日午前0時

その時は、不意にやって来た。

「ハッピーバースデー、いつき」
そこには、エノテラの花束を抱えた色白の客が立っていた。

もう、全部繋がった。

「……遅いよ…

ヒカル……」

「それはこっちの台詞だよ。

いつきの誕生日プレゼント。渡せなかったから、毎日この古本屋で待ってたんだよ?」

「バカ……良いよ、そんな事しなくて……」

「……ごめん」

暫らくの静寂の後、夜乃ヒカルは言った。

「エノテラの花言葉って知ってる?」

「知らないけど、なんで?」

不思議そうな顔をする私。

ヒカルは大きく息を吸い込み、思い切った、しかし震えた声で言った。

「『新しい恋人、自由な心』」

「……なんでそんなこと言うの?」

「いつき、もうこのことは忘れて。約束は果たされたんだよ。

いつきは今まで好きな人が出来ても、その想いを押し殺して来たよね。……もう、良いんだよ」

「嫌っ！　せつかくまた会えたのに！！」

「いつき……もう良いから……」

「良くない！！　だって、記憶が無くなるほど、悲しかったんだよ？　もう……無くしたくないよ……。今だって」

不意に抱きしめられた。

ヒカルの鼓動が伝わってくる。時間が止まって、二人だけになったような錯覚。

いや、感覚なんて人それぞれの物なんだから、本当に止まってしまっているとも言える。

「ごめん、悪かったよ。いつでも見守っているからね。だからいつきは自由に生きて」

「……うん……。約束だよ……。……いつでも見てるんだよね？」

「また約束されちゃった……。うん、約束。織姫と彦星はね、また会えるはずだから」

「……じゃあね」

「うん。じゃあね。また」

私達は、あの日と同じように、別れた。

> i 8 9 3 4 | 1 2 0 6 <

p12・エピソード

2月。

暦の上では春だが、春には程遠い冷たい風。その上、今日は雪がちらついてさえいるのだ。

「さっむいなあ……」

私はマフラーに手袋という重装備で街を歩く。
頬を切る冷気は凍てつき、吐く息は煙のように白い。新雪は行き交う人々の足跡をくつきりと残している。

……今日は久しぶりにあの古本屋へと向かう。
受験の直前は、いくら能天気な私と言えど、流石にふらふらと外出する事も無くなってしまったからだ。

あの夜……ヒカルと最後の言葉を交わした夜。
主人は何も語らなかった。私もそう。
いや、語らなかったと言うより、言葉が出なかった。
でも、あれだけ不思議な出来事があっても、私は少しも怖いとは思わなかったんだ。本当に。

商店街の裏道を通り、さらに奥まった路地を進む。

古本屋のある建物に着いたが、その瞬間、私はドキッとした。

下の階の、古びたCD屋はいつの間にかリニューアルしていて、

結構客が入っていたりするのだ。

いや、この店に限らず、商店街は活気に溢れている。

何でも、この街は再開発するだとか何だとかで、市外からの人口が爆発的に増えたため、こんな裏路地でも人通りが多くなっているのだ。

商店街が活気付くのは、もちろん私にとっても大変喜ばしい事なんだけれど……

私はどこか少し寂しい感じがした。何故なのかはよく分からないけれど。

何か、遠くに行ってしまったような……

私が意を決して階段を上っていくと、そこには見慣れた光景が広がっていた。

手入れの行き届いたシャッター、明るい店内、異常なほどの品揃え。

……そして、白髪に深い皺しわに黒縁の眼鏡の、この店の主。あぬじ

半年以上経った今でも、店は全く変わっていなかった。

客が少し増えたのだろう、本の出入りが多くなったような形跡が至る所に見られる。

レジに積まれた、中古で買い取った本達を片付け終えた主人は、こちらに気付いた。

「いやあ、お久しぶりです、星川さん！ 志望の大学に受かったそ

うで。おめでとうございます!」

「あはは、どこから漏れちゃったんでしょう? まあ、ありがとうございます」

「最近会わないから、どうしたのかと思っちゃいましたよ」

「私、これでも受験生だったんですけど?」

「おっと、そうでしたね。これは失礼、失礼……」

主人は笑いながらコーヒーを入れてくれた。
他の客居るのに良いのかよっ! と言う心の叫びを必死に堪え、私は丸椅子に腰掛けた。

コーヒーを飲む。相変わらず凄く美味しくて、外で冷えきった体には嬉しい。

私がコーヒーを飲み終えてしまうと、主人は言った。

「何か用があつて来られたのでしょうか? 今日の用件は何ですか」

私は、少し考えてから答えた。

「そう言えば、少し気になった事が……」

「何でしょう?」

「ここに私が初めて来たとき、友人のヒロに紹介されて来たんです」

けれど。……ヒロには何て話したんですか？」

「いや、彼には特別な話はしていませんよ。まあ、ちょっと変わった日記は読んで差し上げましたが。それも普通に出版されているような本ですよ？ 毎日この店に通うほど、何がそんなに彼を惹きつけたのか、私にもさっぱり……」

「何だったんだ、ヒロ……？　そうですか、ありがとうございます」

少し間を空けて、主人は少し声を低くして言った。

「星川さん……貴方が聞きたいのは、そんな事では無いでしょう……？」

主人は『あの日記』を取り出してきた。

ズバリ言い当てられると逆に不安になるのが人間って物だ。
私は少しまごついてから、そつと言った。

「この日記は誰が書いた物なんでしょう？　私が記憶を無くす前に書いた物なんでしょうか……？　それにしても、何と言つか、歳のわりに表現が細かいと言つか……」

そう言つと、主人はきよとした顔をした。

「えっ、これは貴方が書いた日記じゃないんですか!？」

「はい、記憶の中では全く」

「うーん、あれはこの書庫から出て来たんです。私はてっきり、星川さんが書いたものかと……」

そこまで言いかけたとき、日記のページの間から、一枚の写真が落ちた。

……色白の子供の写真。

一瞬呆然とした後、主人と一緒に大笑いしてしまった。

「ヒカル、人の気持ちを日記に書くってどういうこと！？ 趣味悪いぞ」

「まあ、ヒカルはいたずらっぽい所もありましたからね……それに」

「それに？」

「貴方に気付いて欲しかったんじゃないですか？ 自分がいなくなっても、悩まなくて良いよって言うメッセージを……」

「……………そうですね。きっと、そうですね……………」

私はいつの間にか溢れた涙をそっと拭い、そっと日記を手を取っ

た。

そして、最後のページにこう付け加えた。

日記の最後のページ

また恋をしよう。『私』の心に、ヒカルとの最後の約束がある限り。
誕生日が来る度にまた決意しな^{たび}おす、七夕の約束が。もう、全て忘れない。

星川 樹

今日も古本屋には客がやって来る。
だが、主人の対応はいつも通り。これから決して変わらない。

「おや、お客さんとはめずらしい。こんな檻^{ほろ}樓屋に何の用ですかな？」

「ちょっと噂を聞いて来たのですが

」

夏の屋気楼、陽炎の様な『私』の物語。

あの夏に取り残されたままだった私は、その日、帰って来た。

（完）

p12・エピソード（後書き）

最後までお付き合い頂き、誠にありがとうございました。

ファミレスの店員の対応など、分かりにくい伏線が多くて申しわけありません。

後からそれと思って読むと大体分かるように設定したつもりですの
で、どうかよろしくお願い致します。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7835/>

置き去りのアルタイル それは古本屋の日記にあった。

2010年11月6日13時31分発行